

第11回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（優秀賞）】

義姉の塩沢紬

松田 祥子・兵庫県川西市

手元に、一枚の渋い紬がある。生成り地に、グレーがかかった焦げ茶の蚊餅が細かく織り込まれ、表面の微かにざらざらした手触りが、独特の重厚な風合いとなっている。

そのはず、それは今や〈幻の紬〉と呼ばれる希少な塩沢紬で、北陸生まれの兄嫁、つまり義理の姉昌子の形見なのである。

初めてその紬を見たのは、兄夫婦が結婚した年の春の彼岸であった。結婚の報告も兼ねて、私達兄妹は早世した両親の墓参りをした。義姉の昌子は珍しい和服姿であった。

「素敵な着物やねえ。よう似合うてはる」
感嘆の言葉を漏らすと、彼女ははにかんだ。

「紬やから普段着ながやけど、今日はこちらのおとさんおかさんに初めてお会いする日やから、箆笥の底から引っ張り出したがて」

お国訛りが、ほっこりと耳に優しくかった。

言われてみると、鶯が囀り新芽の芽吹く、のどかな山峡の霊園のどこかに、両親がそっと寄り添い、静かに私達を見守っているような気がした。

昌子は兄より六歳年上の三十代半ば、離婚歴があった。幼子を婚家に残し、誰も知り合いの居ない大阪に単身で出て来ていた。

二人は職場で知り合い、気脈が通じたのか同棲しそのまま入籍した。式は挙げていない。

「私のような者^{モン}がお兄ちゃんの嫁になっていいがかいね」

彼女は、たった一人の女兄弟である私に、おもねるような口調で尋ねた。どこか薄幸な翳のある気遣いの人であった。私達弟妹と同じに、夫である兄のことを〈お兄ちゃん〉と呼んだ。

兄は、四人兄弟の中でただ一人、両親が健在で家運も隆盛であった頃を知っている。そのせいかどうか、神経質でわがままで、しかも気管支喘息という宿痾に悩まされていた。

そんな兄のところに、働きの優しい兄嫁が来てくれたことが有難く、年齢差や離婚歴のことなどは、さほど気にならなかった。

義理の間柄というのは、距離の取り方が難しい。それでも、女同士気を許すところもあったのか、昌子は私相手にポツリポツリと故郷の話をした。そういう時はリラックスするのをお国訛りになり、目元がほんのり和んだ。

「魚沼地方は、全国有数の豪雪地帯がやから、冬場の内職仕事として、昔から織物が盛んや

ったがて」

長年脈々と受け継がれてきた越後上布と呼ばれる麻布の織物技術を、絹物に取り入れたのが、塩沢紬だとか。その顕著な特徴は、経糸に糸玉を使用していることだという。

「糸玉いうがは、一個の繭に二匹以上の蚕が入っとなって、何本もの糸を吐き出すもんやから、糸同士が絡まってダンゴになるがて」

普通なら廃棄されるクズ糸を利用し、それをわざと織り込んでフシのあるユニークな風合いにした。何というしたたかさか。忍耐強くつましい北陸人ならではの発想である。

「母は有名な織元の織子で、よう稼いだがやから、あちこちから嫁来い嫁来いの声が——」

昌子もその影響で織子を志すが、途中で挫折した。時流の変化で、織物は安易な内職仕事から伝統工芸品に格上げされ、工芸士の資格が求められたのと、もう一つ、不幸な結婚生活の影響が、少なからずあったようだ。

「あの地方は、姑がキツイがすけ有名やから」
眉を曇らせ、にわかにな言葉少なになる。

今や〈鬼の姑〉などという言葉は死語かと思っていたが、地域によってはそうでもないらしい。そして思った。昌子が兄と結婚した理由の一つは、それであつたらう、と。

「あの紬は、昔私が織ったがで私の分身やが、さっちゃんにあげるがやちや」

ある時昌子は、突然そう宣言した。春分の日に伴の紬を着て墓参りをした日から、既に四半世紀が経過していた。場所は、病院のベッドの上、病名は骨髄腫^{ミエローマ}。昌子は死病を患っていた。

しばしば末期の激痛に襲われるため、モルヒネの点滴を受けていた。眠りから覚めると、彼女は時折不思議なことを口走った。

「今、あんたがたのおかさんに会うて来たが。私を労うて下されたがや。嬉しかったちや」
病人の戯言とは思えぬ確固とした響きがあった。病み疲れた顔貌の中で、目だけが不思議に澄んでいた。彼女は本当に別次元の世界に行き、そして戻って来たのだ、私は本気でそう信じざるを得なかった。

——昌子が逝って三十年弱。私も老いた。

先日、久しぶりに形見の塩沢紬を広げて眺めているうちに、ふっと彼女の故郷にあるという紬の記念館を訪ねたくなった。それも、雪深い季節に……。

そうすれば、あの薄幸な翳のある優しい義姉を、真底理解することができるだろう。そんな風に思えるのだった。